

平安時代庭園の施工技術

鈴木 久男

1. はじめに

ここ数年平安京やその周辺部の発掘調査によって、平安時代や鎌倉時代・室町時代などの各時代の庭園遺構を明らかにしている。こうした庭園遺構の調査は、文献史料や絵巻物などによってなされていた研究とは違った研究方法を可能にした。特に、施工技術や立地条件などの解明には考古学による調査の成果は不可欠であると言えよう。

ここでは最近の調査で明らかにした、平安時代や鎌倉時代などの庭園遺構から当時の施工技術の一端を述べてみたい。また、平安時代に著されたとされている『作庭記』の記述内容とも若干比較してみたいと思う。

2. 庭園遺構の調査状況

平安京やその周辺部において実施した発掘調査によって発見した、平安時代の庭園遺構を中心に検出状況や遺構の特徴について述べてみよう。

1 平安京内の庭園遺構 京内で検出した遺構は、高陽院などに代表される有力貴族の庭園や神泉苑などのような天皇に関係する庭園の他に、所有者が特定できないものなどがある。いずれの場合も、調査面積に制約があり全容を明らかにした例は一件もない。

① 高陽院跡（調査地 京都市上京区米屋町、上鍛冶屋町、中京区大文字町、中之町）

高陽院（賀陽院）は、平安時代前期の賀陽親王の邸宅の頃と平安時代中期の藤原頼通の頃とに大別できる。賀陽親王の賀陽院跡は、平安京左京二条二坊九・十町に位置し東西一町、南北二町の広さであった。一方、藤原頼通の邸宅時の高陽院は東西二町・南北二町の規模を有していた。すなわち、左京二条二坊九・十・十五・十六町を占めていたのである。

これまでに、高陽院跡（賀陽院）における発掘調査は過去6回ほど実施している。この他に、試掘調査や立会調査なども随時実施している。そうした一連の調査によって、平安時代前期から後期にいたる間の庭園遺構や建物跡の一部を明らかにしている。

高陽院跡の庭園遺構を最初に発見したのは、1981年度に実施した第1次調査である⁽¹⁾。検出した遺構は、平安時代後期から鎌倉時代にいたる間に造られた園池や洲浜跡それに建物跡と景石である。

池跡に造られていた洲浜跡は、改修された痕跡が4回ほど認められた。いずれの時期の洲浜も、拳大の玉石を敷き詰めて構築をしていたが、特に目を引いたのはⅡ期とした時期のものである。では、洲浜に認められた園池の変遷について古い順に見てみよう。

I期 この調査で検出した最も古い洲浜跡で11世紀中頃である。洲浜は西から東出している。洲浜に使用している玉石は何れも拳大の川原石である。池底は、小石を粘質土で貼り固めている。池内堆積土からは、完形に近い土器や金銀の蒔絵を施した硯などが出土している。

II期 I期の洲浜より北側の池を砂礫土などで埋め立てて、陸部を拡張している。I期の洲浜の上へ、新に洲浜を東西方向に作り変えている。この洲浜の幅は、調査区東側は240cm、西端では約560cmに造られていた。洲浜の玉石敷きは、下縁を20cmかの河原石をもちいて縁取りしている。玉石は上にいくにしたがつて、徐々に小粒になっていく。玉石と玉石との間は、ほとんど隙間なく造られている。これらの玉石は粘質土で貼り固められていた。洲浜の上端部と池底との高低差は30cm前後を測り、この時期の園池は比較的浅いものであった。

III期 II期の洲浜を埋め立てて、園池の規模を縮小している。この時期の園池の洲浜は、II期ほど丁寧には仕上げていない。池の底は、先のをそのまま踏襲している。

IV期 III期の池跡を瓦を使用して完全に埋め立てて、新たに池を造り替えている。また、池の肩や陸部も土盛りを施している。今まで見られなかった景石が、陸部と池の中とに据え付けられていた。

九町跡では、平安時代前期から後期に至るまでの庭園遺構を一部発見した⁽²⁾。平安時代前期は、賀陽親王の邸宅があった頃である。この時期の庭園遺構は、玉石を敷いた池跡である。玉石敷きは、池の肩部から底部にかけて行われていた。平安時代後期になると、先の池跡は埋め立てられてしまい、その代わりに築山や溝が造られた。ただし、1981年に調査した園池や洲浜は、この調査地までは続いておらず検出できなかった。

十五町跡の調査では、園池や島それに池を埋めて構築した陸の一部を検出した⁽³⁾。これらの遺構は何れも、平安時代中期末から後期にかけて造営されたものである。検出したのは、二町四方の広さであった頃の高陽院跡のほぼ中央部に位置する。調査区全体が池跡であったために、汀の位置や池の深さなどについて明らかにすることができなかった。しかしながら、池跡底部には腐植土層や砂の堆積が認められたことなどから、この池跡は比較的永い間水をたたえた園池として機能していたと考えられる。池跡の深さについては、埋め立てた土盛りの厚さなどから30cm程度の深さであったものと考えている。

十六町跡の調査では、平安時代中期末から後期にかけての園池と景石を発見した⁽⁴⁾。この時期は、藤原頼通が栄華を極めていた頃の高陽院である。この調査で明らかにした園池は東岸部の一部で、緩やかな傾斜面の汀に拳大の玉石を粗くまいて洲浜を形造っていた。池底や肩部は黄褐色を呈する洪積層で、湧水などは全く考えられず、池の水は他所での湧水を導入していたものと考えられる。池の水は、池底が粘質土であるため保水力が良く、底部近くには腐植土層が堆積していた。

景石は、園池の東岸部に大小4個ほど据え付けられていたが、北端で見つけた1個は後世に若干動かされていた。検出したすべての景石は、掘形を掘った後に据え付けたもので、景石の下には根固め石が詰め込まれていた。こうした石の据え付け方法は、大規模な建物の礎石を据え付けるのと全く同様な手法である。石の用い方は、いずれも石の長軸を横にし上端部は平坦面を水平

にしている。据え付けは、石のほぼ3分の1を地中に埋め込んでいる。各景石の重量は、1,100kg、400kg、200kg（2個）を測った。石質は、チャート、珪質頁岩、珪岩などであった。また、十町跡の調査では、平安時代後期の築山と西岸の一部を検出している。

② 堀河院跡（調査地 京都市中京区堀川通二条下ル土端町、二条油小路）

調査地は、平安京左京三条二坊十町に位置し、東西一町、南北二町を占める堀河院跡の北半部にあたる。調査は、1983年から1984年にかけて約4000m²実施した⁽⁵⁾。その結果、平安時代後期の建物跡や庭園遺構をはじめとして鎌倉時代、室町時代、江戸時代などの遺構を多数検出した。室町時代の遺構のなかには、京都ではめずらしい半地下式の方形をした池跡を発見している。

さて、平安時代の庭園遺構は、池跡、遣水跡、滝石組み、景石などがある。この他、建物跡を示す柱穴も多数検出している。次に、これらの遺構について見てみよう。

池跡は、中世や近世の遺構と重複したり、後世の削平などを受けているために遺構の残存状況はけっして良くなかったが、それでも園池北半部の一角を約40mにわたって明らかにすることができた。調査した範囲内の、池跡の最大幅は約20mを測った。深さは均一でないが、平均50cm前後であったと考えている。

池跡の北東隅においては、景石を「コ」の字形にしかも直線的に配置した石組を検出している。しかも、この部分の池底には疎らではあるが玉石を敷き詰めている。また、この玉石敷きの上に景石を、据え付けているところもあった。池底のレベルも西側に広がる池底より高くなっている。こうしたことから、この一角は西の池跡とはやや性格を離れた施設ではないかと考えている。すなわち、この部分の東奥を滝跡、そして玉石や景石を据え付けた「コ」の字状の所を滝と池とを結ぶ遣水状の流れと考えた。なお、ここの石組は石の長軸を横にして据え付けていた。

一方、汀の付近には、洲浜を示すような玉石敷きはほとんど見られなかったが、園池の北東部に一部それらしい箇所が認められた。

遣水跡は、調査区北側のほぼ中央部で発見している。水は北東から南西方向に流れ池へ注ぎ込むように作られている。遣水跡の要所々には景石を点々と配置しているが、溝の肩部や底部には玉石などは敷き詰めていなかった。

出土した景石の石質は、チャート、ホルンフェルス、砂岩、花崗岩、頁岩、ピロウブレッチャーなどがみられた。ピロウブレッチャーは京都盆地周辺部からは産出せず日本海側から運び込まれたものと考えられている⁽⁶⁾。

③ 神泉苑跡（調査地 中京区押小路堀川通～美福通）

平安京造営にともなって左京三条一坊に営まれた禁苑で、東西二町、南北四町の規模を占めていた。現在も二条城の南側にその一角と思しき池を見ることができる。

数箇所の調査によって、神泉苑跡の北半において池や導水溝跡、舟着場とも考えられる施設などを確認している⁽⁷⁾。池跡は北岸の一部で、玉石を敷いた汀を明らかにした。また、舟を岸に着けるために設けられたと推定される板を用いた護岸施設の調査をした。池跡の深さについては、調査区が狭かったため確認できなかった。池跡に注ぐ導水溝跡は遣水と考えられるが、特別な施設や

意匠は見られなかった。

池跡の北東では、下層から縄文時代後期の谷状の地形を確認し、そこには樹木や木の葉を含む層を認めた。このような地下の地形によって池の水は保たれ、日照りの時も池の水が渴れなかったのであろう。

④ 左京四条一坊一町跡（調査地 京都市中京区壬生朱雀町）

調査地の過去4回に渡る調査によって、平安時代前期の池や建物跡、平安時代中期から後期の建物や道路、井戸・土壌・溝跡などを検出している⁽⁸⁾。調査区の西側は朱雀大路に面し、大路を隔てた西方には朱雀院が営まれたところである。

池跡は、一町の南半部に位置するが西岸・東岸・北岸の一部を明らかにしただけで全容は不明である。池の東岸は緩やかな勾配に作られ、汀には拳大の河原石を用いて洲浜としていたが、西岸はやや急勾配であり洲浜も玉石も少ない。深さは30cmから40cmを測り、池底や汀には植物遺体が堆積していた。今までに確認した池の東西幅は38mである。池跡の北東部には導水溝跡が認められ、池へ注ぎ込む所には柵状の施設が設けられていた。池は9世紀中頃に作られたが、10世紀には廃絶してしまった。

⑤ 三条棧敷殿跡（調査地 京都市中京区三条通烏丸西入ル御倉町）

調査地点は平安京左京四条三坊九町に相当し、平安時代後期になると三条棧敷殿になったり藤原実能邸宅として利用される。調査の結果、平安時代中期後半から後期にかけての遺構面で、遣水跡、島跡、景石などや建物跡の一角も発見した⁽⁹⁾。

遣水跡は、ほぼ東西方向に検出し、流れの中央部には島を構築していた。遣水跡は、全面に拳大の玉石をほとんど隙間なく丁寧に敷き詰めていた。また、2個の景石も据え付けられていた。今回発見した範囲内での遣水跡の最大幅は約6.5m、深さ30cmから40cm前後であった。さて、調査担当者はこの遺構については次のように述べている。「その規模や底部の平坦さから見て浅い池状を呈した部分と見られ、東西の未調査区に細くなって伸びる遣水の延長部を想定している」としている。すなわち、担当者はこの部分を池跡と見ているが、筆者は毛越寺で発見されたような遣水跡の一部ではないかと考えている。

島跡は、遣水跡のほぼ中央部に構築されていた。その規模は、東西（長軸）約4m、南北（短軸）約2mである。そして島跡の上には1個の景石が据え付けられていた。この景石の据え付け方は、陸部における一般的方法とは異なり、掘形をもたずただ島の上に置いただけである。こうした石の使い方は、水中以外にはほとんど見られない。では、なぜこのような一見不安定にも思える石の据え方をしたのであろうか。その理由は、石を北西方向からみると意図して据え付けたものであることがわかる。すなわち、景石の上端部に見られる褶曲を亀の首の部分と見立て、石を1個の亀としている。結果として、この景石は亀が島の上で甲羅干しをしている姿に映るようにしている。

景石は、先にも述べたように遣水内や島の上などにみられたが、この他にも調査区の北東部では景石を南北方向へ千鳥風に配置しているところもあった。

建物跡は、調査区が狭かったために全体を明らかにするまでには至らなかったが、9箇所の柱穴跡を検出した。遣水跡の南側の建物跡は、東西の柱間2.4m、南北柱間は3.6mであった。もう一方の建物跡は、遣水跡を南北に渡るように作られ、柱間寸法は北から5.4m・3mであった。柱穴の1箇所は島の西端に位置していた。

なお、この庭園にどのような樹種の木が植栽されていたかについては現在整理中であるため詳細は明らかでないが、今までに遣水跡の埋土から梶の木の種子が発見されている。

⑥ 左京六条三坊十町跡（調査地 下京区烏丸通五条上ル悪王子町）

庭園遺構を発見したのは、十町の南東部である⁽¹⁰⁾。検出した遺構は、最大幅7m、狭いところでも3mを流路状の遺構で、汀と底部には拳大の玉石を敷き、底部はやや盛り上がりを見せている。また、調査区の西側には「く」字状に曲がる橋脚跡を検出している。この遺構の西側は、旧水路上に作られている。検出した遺構の解釈については、池とする考えと遣水であろうと理解する2者がある。私は底部が舟底型を呈し、しかも幅に比較して深さが60cm前後を測ることなどから遣水ではないかと考える。

⑦ 左京六条三坊九町跡（調査地 下京区五条通河原町西入本覚寺前町）

調査地の一角は、源融の営んだ河原院の推定地に位置する⁽¹¹⁾。調査区の北側では、平安時代前期から中頃の六条坊門小路とその側溝、南側では平安時代前期には存在していた池を検出した。池の汀やその周辺部には、景石や洲浜などは見られなかったがこの池が園池として利用されていた可能性が極めてたかい。

⑧ 右京三条二坊八町跡（調査地 中京区西ノ京原町）

調査地は右京三条二坊八町に相当し、一町の北側には二条大路が、西側は西堀川小路が、東側には西靱負小路が通っている。2回実施した発掘調査によって、平安時代前期から中期にいたる遺構を多数発見している⁽¹²⁾。1986年の調査では、西靱負小路の側溝と考えられる跡や掘立柱建物跡それに園池・井戸・河跡などを検出している。また、1990年の調査でも86年に発見した園池の南側部分と掘立柱建物跡の一部を明らかにしている。

しかしながら、園池の全容、建物の配置と園池の位置関係などについてはまだ十分に明らかにしていないが、次の様な段階までは確認している。

この池跡は、深さ40cm前後と浅く底が地下の湧水層まで達しておらず、水は別な所から導入していたものと考えられる。池内の埋土には、多量の腐植土が認められておりこの池跡は園池として使用されなくなってからも、永く溜め池状になっていたらしい。

池の景観は一様でなく、2回とも全く違った調査成果を得ている。すなわち、園池北西部では池の水際に20cmから40cm前後の石を並べ、隙間の開いた部分には更に拳大の玉石を詰めている。また、長軸を横にした景石を適当な間隔に据え付けていたが、いずれも石の長軸は池の輪郭に平行させていたし高さもほぼ同一であった。他方、この石組の南東側は、緩やかな勾配の玉石敷きの洲浜としている。

園池の北側で掘立柱の建物跡を2棟ほど検出している。その内の1棟は、石組を施した池跡の

北西部で園池に接して建てられていた。この建物跡は、梁間2間、桁行4間の南北棟で東側には庇がつく。なお、庇の南端1間分は母屋の規模より短い。

2 京外の庭園遺構 平安京外で確認した庭園遺構は、ほとんどが寺院や離宮（別業）に営まれた御所や御堂などに関係するものである。こうした庭園遺構は、池を中心とした意匠であるためそれを容易にしやすい場所が選定されている。

⑨ 嵯峨嵐山（調査地 右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町）

調査地は嵐山に所在する天龍寺の南隣に位置する。検出した庭園遺構は、平安時代前期の池、洲浜、景石の据え付け穴などである⁽¹³⁾。池の規模は、東西約47m、南北約18m、深さは最も深いところで約2.2mを測る。洲浜は玉石を乱雑に敷き詰めて緩やかな勾配の洲浜を造っている。検出した範囲での洲浜の幅は3.5mである。この洲浜は、池の東岸に見られたが、作庭当初は池の周囲を巡っていたものと考えられる。洲浜が内側の池は急激に深くなるが、このような洲浜から池底部が急激に深くなる例は本例だけであり希な例である。この池は、旧河川の上を選んで造られている。遺跡の規模や建物配置、それに誰によって営まれたかなどについては明らかでない。出土遺物の中に、須恵器の小型小壺や緑釉の鉄鉢・壺・盤・水注など仏教色の強い遺物がみられる。また、「旨」銘を飾る軒平瓦が出土しており中央との深い関係の人物を想定させる。こうした状況から庭園遺構は、別業内に営まれた仏堂に伴うことが推定されている。

⑩ 嵯峨院跡（調査地 右京区嵯峨大沢町）

嵯峨院跡は、現在の大覚寺境内に位置し、大沢池や景石は嵯峨院の園池を今に伝える遺構と考えられている。近年、名古屋の滝跡と大沢池との間において発掘調査が行なわれ、平安時代前期の遣水や石組、平安時代後期から鎌倉時代にかけての小池や遣水などが確認されている⁽¹⁴⁾。平安時代前期の遣水は、流路状を呈していたらしく玉石や景石などは発見されていない。滝組の石は、後世に手が加わり旧状を留めていたのは2個だけであった。

⑪ 鳥羽離宮跡（調査地 伏見区竹田、中島町一帯）

鳥羽離宮は、11世紀後半に白河天皇によって造営が始められ、白河法皇逝去後は鳥羽法皇によって進められた。造営以前からあった自然の池を巧みに手を加えながら、離宮の園池として利用した。池は、3箇所で大別できる。特に東殿の池は、総て人工的に造ったものである。そのため、南殿や田中殿の池の水位より1mほど高い。庭園遺構は、南殿・北殿・田中殿・東殿などで検出している⁽¹⁵⁾。いずれも、趣を異にした意匠の庭であるが、池を中心としていることは共通している。南殿は寝殿と御堂の周辺部において発見している。北殿は、勝光明院阿弥陀堂跡周辺部で洲浜・景石・島などを明らかにしている。田中殿は、金剛心院九躰阿弥陀堂跡や釈迦堂跡などで洲浜・景石・滝石組・釣殿廊・橋・舟着場跡などの遺構を良好な状態で調査している。東殿では、穏やかな池の汀に作られた洲浜や遣水、島などを認めている。これらの庭園遺構は、12世紀前半から中頃にかけて営まれたものである。

⑫ 栢杜遺跡（調査地 伏見区醍醐栢ノ森町）

栢杜遺跡は山科醍醐山西麓、醍醐寺の南方にあたり標高48mから50mの丘陵状に位置する。発

掘調査によって、八角円堂・方行堂・遣水ならびに景石などの遺構が良好な状態で発見された⁽¹⁶⁾。この遺構の八角円堂は12前半から中頃に活躍した源師行が、方行堂は東大寺別当俊乗房重源が営んだと考えられているが、庭園遺構はそのどちらであるかについては明らかでないが、遺構の配置から考えると方行堂に伴うように思われる。庭園遺構は遣水で、要所には低い滝や島などが設けられている。遣水の幅は3 m以上もあり、1/30の勾配で水を東から西へ流していたことが明らかにされている。

⑬ 鹿苑寺境内安民沢（調査地 北区金閣寺町）

鹿苑寺境内には鏡湖池、安民沢と呼ばれる二つの池がある。安民沢は鏡湖池より北側の一段高い所に位置する。池の東側には南北方向に細長い島が設けられている。そして、池の北岸や島の汀には大小の景石が点々と据えられている。また、東岸の汀近くには谷の水を水源にした小さな滝が設けられていることが、近年の調査によって発見された。また、池が浚渫された際には、島周辺の池底から平安時代の瓦や土器が採集された⁽¹⁷⁾。汀の景石の据え付け方や姿、池底から平安時代の遺物が出土したことなどから、安民沢は平安時代に造られたものと考えられる。

3. 発掘調査から見た施工技術

先に述べた遺跡の調査で明らかになった、各種の庭園遺構から当時の施工技術や意匠の特徴などをあげてみたい。また、一部ではあるが『作庭記』の記述内容と比較しその実態を検証してみたい⁽¹⁸⁾。

1、景石 自然の石は、日本庭園には欠くことのできない重要な素材である。各遺跡においては、作庭された当時の姿をよく留めた大小の景石を調査している。特に鳥羽離宮跡の調査では、200個近い数の景石を発見している。

〈石の長軸と短軸〉 ここで述べる石の軸とは、石の寸法の最も長い方向を長軸、次に長い方向を中軸、長軸に直交する最も短い方向を短軸とした⁽¹⁹⁾。そして、石の据え付けに際してどの軸をどちらの方向に向けているかを問題にしようとするものである。特に、長軸の方向が注目される。例えば、鳥羽離宮金剛心院の釣殿廊東側では長軸を横にした景石が多く見られたが、そこからやや北側の岬状の先端部分の景石は長軸を縦

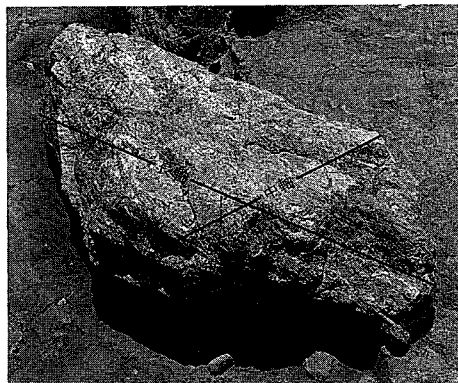


図1 軸の凡例

方向に使っていた。この様な例は極めて希である。その対岸では扁平な石の中軸を縦方向に立てていたが、この様な用い方も例が少ない。鳥羽離宮以外の遺跡でも、石の長軸を縦方向にして据え付けた例は少なく、長軸を横にした据え方が良く見受けられる。その多くの場合、石の上端面は水平に据え付けている。

〈据え付けの状況〉 据え付けの方法には、石よりやや大きめの掘形に据える場合と石の底部に根固め用の石を詰め込む場合とに2分類される。その他の方法として、所定の位置に石を据え置き、その後その周辺に土盛する場合もある。ごく稀な例として、地上に姿良く置いた例もある。

陸部の場合大抵の景石には掘形内が観察され、石全体の1/3から1/2は地中に埋め込まれている。しかしながら、汀よりやや高い位置の場合には、石の長軸や中軸を立てようとする時は陸部と同様の方法が取られているが、短軸を立てている時は浅い掘形や掘形が観察されない場合が多く認められる。さて、鳥羽離宮や平安京の調査では、池のなかに景石が据えられているのを時々認めるが、掘形が観察された例は今だ見られず、池内の据え付けは石の根を詰め石で固めるのが一般的であったらしい。

ところで、石を連続して据え付けている場合、石の上端面の高さは幾つかのグループに据えられている。しかも、1グループ内での誤差はほとんどなく、その据え付け高は正確である。

〈石質〉 平安京は京都盆地の北側に造営され、周囲は山に囲まれている。これらの山麓からは庭に適した石が産出し今でも銘石を認めることができる。各遺跡で発見される景石として用いられている石は、チャート・頁岩～粘板岩・砂岩・ホルンフェルス・脈石英・黒雲母花崗岩・珪岩・珪質頁岩などである。最も多いのがチャートである。これらの石は、丹波帯に見られるもので、平安京から北東にある高野川上流付近で採取されたものと考えられている。この他、京都盆地以外の地から運び込まれたものに、緑色片岩やピプロプレッチャーなどがある。緑色片岩は、鳥羽離宮東殿跡や金剛心院跡などでは長さ1m前後のものが数点出土している。搬入された時期は12世紀前半から中頃と考えられる。また、鳥羽離宮では、ポットホールが見られる石もあり瀬戸内沿岸から運び込まれたと思われるものもある。ピプロプレッチャーは、堀河院から出土しているが、搬入された時期は12世紀中頃以前である。

〈見立て〉 平安京左京四條三坊九町跡の中島上で検出した景石は、甲羅干している亀の姿によく似た石を用いていた。この景石は、地中に一切埋め込まれておらず置いただけである。一方、鳥羽離宮金剛心院跡では、三尊仏風に立てたと思われる石組が池の汀近くに見られた。この様な例も極め希な例であり、それは、少なくとも12世紀中頃には見ることができる。

※ 『作庭記』には、景石(石)に関わる記載が多く認められる。据え方については、「石をはつよくたつへしつよしとふはねをふかくいるへしか」と述べさらに「石をたて、は石のもとをよく、つきかためてちりはかりのすきまもあらせすつちをこむへきなり」と記している。景石はつよく立てよ、つよいと言うのは根を深く入れた後に、石のもとをよくよく突き固めて隙間無く土を込めなければと書いている。一方、池の中に据える場合については、「池の石はそこよりつよくもたえたるつめいしを、きてたてあけつれば年をふれともくつれたる、ことなし」とあり、池底からつよくささえるつめ石を置いて立てれば年を経ても崩れることはないと述べている。そうした据え付け工法は、先述した発掘調査の結果がそれを証明している。荒磯などに見られる離れた石については、「はなれ石の根には水のうへにみえぬ程に大きな石を両三みつかなえにほりしつめてその中にたて、つめ石をうちいるへし」とある。

2、池について 池は、A：自然の池を一部人工的に手を加えて園池に利用している場合(自然の池の利用)、B：池全体を人工的に掘り窪めて作った場合(掘り窪めによる池)、C：谷地形の出口部分に築堤して水を溜めて池にした場合(築堤による池)とに大別することができる。そ

して、池の水源をどのような方法で維持するかによってさらに分類される。すなわち、池底からの湧き水を利用する場合、敷地内にある自噴する泉を利用する場合、他の場所から導水溝によって引き入れる場合などが考えられる。

A：自然の池の利用 この典型例は鳥羽離宮である。鳥羽離宮跡で現在までに二十数カ所で、園池の調査を実施している。その結果、離宮内の池は大きく三つに分けられることが明らかになった。その内、最も大きいのは、南殿・北殿・金剛心院・成菩提院（泉殿）などの殿舎や御堂を一つにつないでいる池で、規模や全容は明らかではない。この池は、鳥羽離宮造営以前からの自然の池を巧みに利用したもので、幅や深さは場所によってまちまちであった。このため池の水位は季節の影響を受けやすい環境であったことは確実である。池の水位は洲浜などの高さから、海拔12.6m前後の成果が得られている。

神泉苑跡の調査では、平安時代の遺構面下層から、縄文時代や弥生時代の遺物が出土する谷状の流路を発見した。流路内には、樹木や木の葉なども認められ、この流路は埋まった後も地形に沿って地下水が流れていたらしい。ところで池の推定地は、当時の遺構面より低いことが確かめられている。こうした地形の変化や湧き水の豊富さなどから、神泉苑の池は平安京造営以前からあった池を苑池として池としていたと思われる。

B：掘り窪めによる池 嵯峨嵐山で発見した池は、旧河川上に掘り窪められて造られる。特に、洲浜から内側が急激に深く掘り下げられているのは、地下水によって池の水を得ようとした結果と考えている。

高陽院跡の今までの調査では、5地点で痕跡を確認しているが、その内の1箇所は平安時代前期の賀陽親王邸の頃のものである。他の4箇所は平安時代中期以降（藤原頼通、二町四方）の頃の池である。賀陽親王邸の池は、堀川小路のすぐ東側に位置し池底はすべて砂礫層であるためこの池の水は、池底からの湧水によって保たれていたことがわかる。ところが、高陽院の頃の池は、洲浜の高さが40.7mを測る所と41.3mを測る所がある。高陽院跡の自然地形は、北東に高く南西に低くなる、こうしたことから高陽院の池は、2箇所に以上に分かれていた可能性がある。ところで、池の東側では池底は褐色系の粘質土であるため池底からの湧き水は期待できず、文献に記されているように邸宅内にあった豊富な湧き水によって保たれていたことが想像される。賀陽院・高陽院の池の深さは、30cmから40cm前後と浅い。

堀河院の池は、規模や形態ともほとんど明らかではない。池底近くの標高は、海拔37.5m、遣水付近の高さは38mから38.5mである。堀河院の北側に位置する高陽院との高低差は約2.5mを測る。平安時代の遺構面を掘り下げたところ下層からは、神泉苑と同様に古い時代の地下の流路が見られる古木も出土した。池底は砂礫層も認められており、池底からの湧水によって池の水を保っていたものである。

鳥羽離宮東殿跡の南側に設けられた池は、先に示した園池とは完全に切り離れて独立している。規模は、南北130m・東西120m・深さ50cm前後である。水位は、13.4m前後で先述した池の水位より約80cmから1mほど高くなっている。こうした状況は、池底からの豊富な湧き水によって生じ

た結果と考えている。

C：築堤による池 大覚寺大沢池、鹿苑寺安民沢、竜安寺鏡池などがそれである。いずれの場合も、眺望の良い山裾に位置し背後の山や谷からは豊富な水が得られるところである。3箇所とも今も池の機能を果たしているためほとんど調査されていない。鹿苑寺安民沢や竜安寺鏡池については堤部分を一部調査されている。その結果、現在の堤の下には古い時代の遺構が埋没していることが確認されている。しかしながら、築堤の方法や造営当初の実態は明らかでない。

3、洲浜 洲浜は、平安時代前期には京内の池の汀に認められる。現在までに調査したなかでは、賀陽親王邸・左京四条一坊一町・嵯峨嵐山などの遺構があげられる。用いている石の大きさは、基本的に拳大前後の玉石である。3遺跡とも玉石を粘土などで固定した様子は見られない。汀の勾配については、嵯峨嵐山の例は最も緩やかに仕上げられ、高陽院や左京四条一坊一町はやや急勾配である。

平安時代前期から中期の遺構としては右京三条二坊八町があげられる。緩やかな汀に、拳ほどの玉石を撒いたような洲浜に仕上げている。

平安時代後期の高陽院跡では、同じ場所で四時期の洲浜を調査した。なかでも、B期（12世紀前半）とした頃の洲浜が姿も美しく仕事も丁寧であった。特に、池底近くの洲浜敷きの石は大粒であるが、上に行くに従って徐々に粒を小さくしている。この様に玉石を使い分けた洲浜は、高陽院でもここだけであり、他の遺跡にも見受けられない。

鳥羽離宮跡では北殿跡・東殿跡・田中殿跡・金剛心院跡などで見受けられるが、それぞれ趣を異にしている。

北殿苑池西岸の洲浜は、緩やかな汀の斜面に拳大の玉石を幅2mにわたって敷き詰めて洲浜としている。西岸から50mほど離れた池に造られた島では、拳大あるいはやや小粒の玉石と、掌くらいに割った灰色の瓦片とを敷き詰めて洲浜としていた。東殿跡の玉石敷きの幅は1m前後で、拳大よりやや大粒の玉石を用いている。苑池南西岸には、玉石と割石とを用いている場所もある。東殿の洲浜は敷き詰めたと言うより、撒いたと言う表現の方が良いかも知れない。これは、池のベースが砂のために玉石がどうしても移動しやすいからであろう。

金剛心院跡で洲浜が見受けられたのは、九躰阿弥陀堂の前池と釈迦堂北東部の苑池西岸とである。九躰阿弥陀堂の前池では粒の揃った玉石を敷き詰めていたが、阿弥陀堂正面に架かる橋跡の北側は南側がより仕事が丁寧であった。一方、釈迦堂北東部は玉石と灰色の瓦片とで形作っていたが玉石は疎らで仕事は余り丁寧であるとはいえない。

4、島について 島は、平安京左京四条三坊九町跡・鳥羽離宮跡・栢杜遺跡・高陽院などで発見しているが、形態や構築の工法はそれぞれ異なっている。

〈構築工法〉 平安京左京四条三坊九町跡の島は、遣水の内に設けられた長さ4m、幅2m、高さ0.4mの規模である。島を構築する盛土は地山土と同質であり、構築時にはそれを丁寧に突き固められている。

鳥羽離宮跡では北殿跡で2箇所、東殿跡で1箇所ほど確認している。3箇所とも、形態・規模

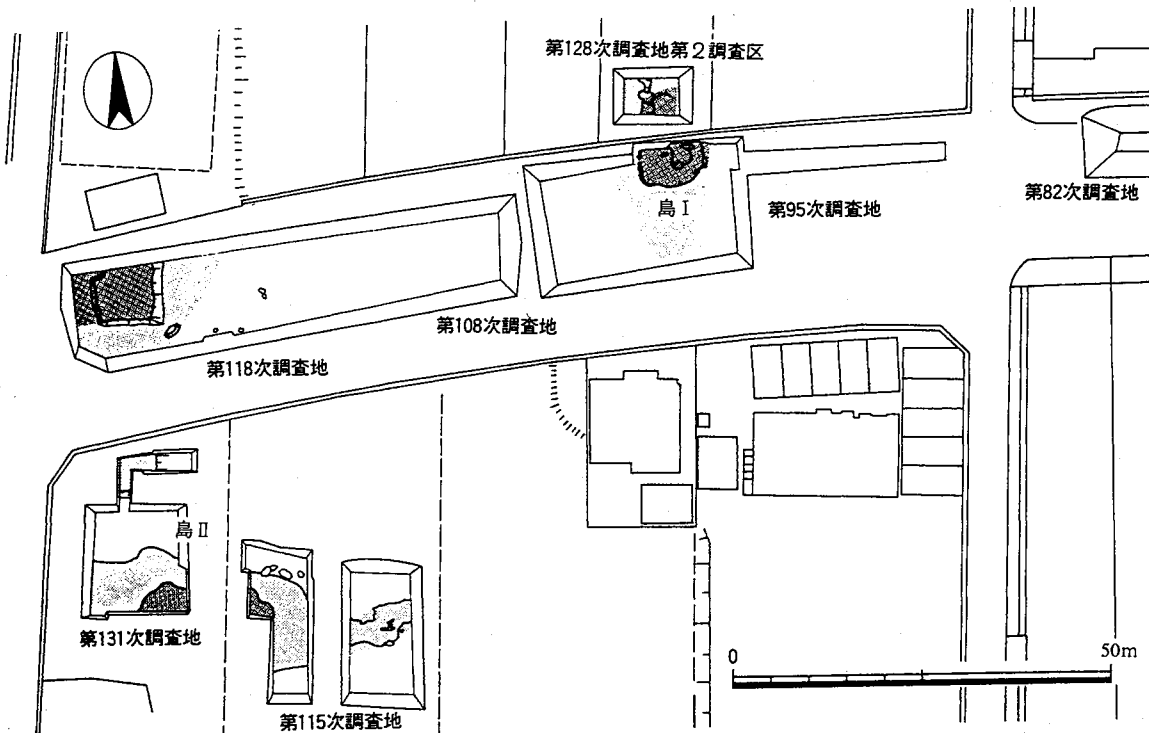


図2 島位置図

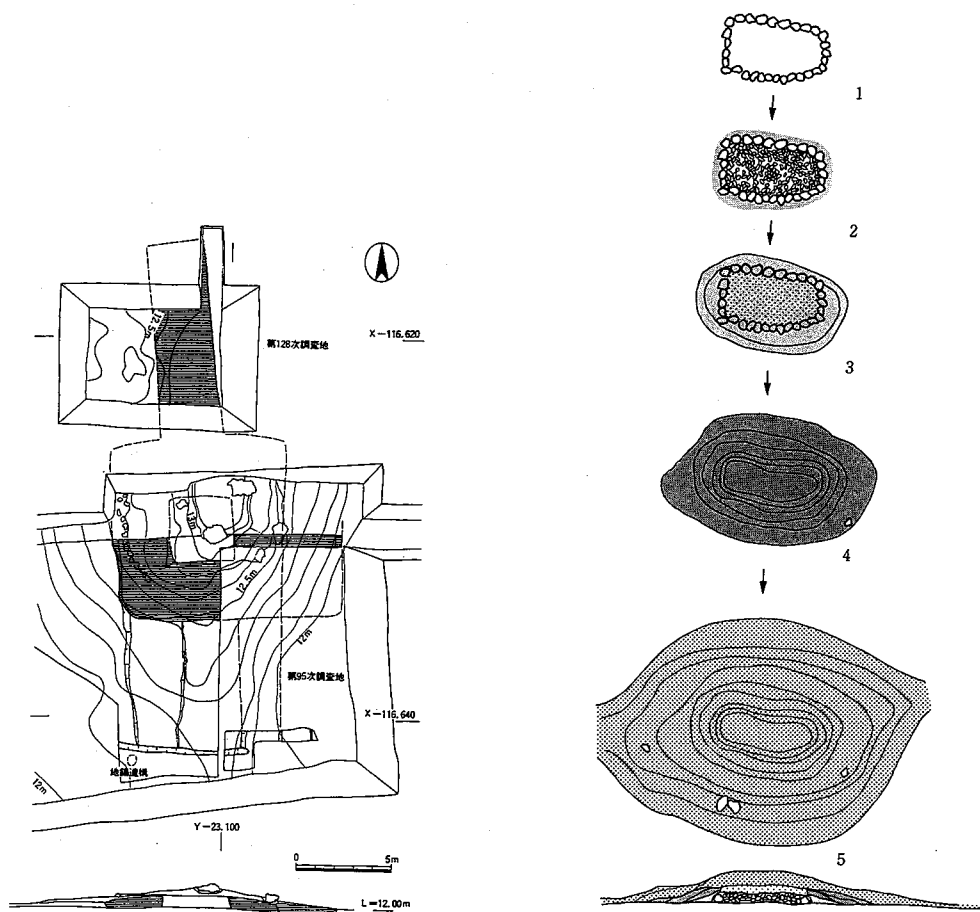


図3 島 I 実測図

図4 島 II 構築復原図

・工法とも違いを見せている。北殿で調査した島1は、池を作る際に島の北側と南側になる部分に幅3m、深さ0.3m~0.7mの溝を掘り下げる。そして、溝内を突き固めながら徐々に埋め戻し、その後は島の形を整えながら突き固め盛り土を行なっている。その途中で景石を据え付けている。島1の西側で発見した島2は、池の埋め立てによって構築している。すなわち、島としたい場所の池底に約1m前後の自然石（花崗岩）を環状に並べる。この中を拳大の玉石で埋め立てる。その途中で、石列の輪が崩れないように外側にも礫混じりの褐色土で花崗岩をおさえる。石列内の埋立がほぼ終了してからは、玉石と粘土質の土を交互に突き固めながら盛り上げて島を形作る。この段階で、一部景石を据え付けている。最終段階になると、島の表面は褐色土で覆い仕上げている。汀部分は礫混じりの土を固めて仕上げている。

一方東殿の島跡は出島で、南北約70m・東西約42m・高さ約1mの規模である。構築法は、池を掘り下げる際に島の形に掘り残して島を造っている。

栢杜遺跡の例は、遣水のほぼ中央部に位置する長さ2m・幅1mの小さい島跡である。長さ0.7m前後の石を7個ほど島の形に並べ、その中へ土を入れて構築していた。島の上流にあたる先端部分には角張った石を、反対側にはやや細長い石を用いている。この様な形式の島跡は、中世以降よく見られる亀島につながっていくものでろう。この島はその初現期の貴重な例である。

島の構築や景石の据え方については先述したような種々な方法があり、『作庭記』はその1例を記していることがわかる。

〈意匠〉 平安京左京四条三坊九町跡の中島は、先に見た島の上に西向きの亀に見立てた景石をおいていた。島全体にも流れ内と同様に玉石を敷いていたものと推定される。鳥羽離宮跡では、島に据え付けられた景石はいずれも低い姿に据えられ、長軸を立てた石は見られない。玉石を用いた洲浜は、東殿跡以外にはなかった。北殿の島2は、汀近くに景石が見られたが高所には何も認められなかった。栢杜遺跡の島には、小形の樹木が植えられていたものと思われる。

※『作庭記』によれば、「おほすかたをとりおきて石をたて、のち次第に嶋のかたちにはきさみなすへきなり」と記されている。これによれば、島は池を掘る時におおよその形を作り、景石を据え付けた後に細部を作るべきであると述べている。

島の種類や形については「山嶋・野嶋・杜嶋・磯嶋・雲形・霞形・洲浜形・片流・干潟・松皮等也」とありその特徴が述べられている。すなわち4種類（山嶋・野嶋・杜嶋・磯嶋）の島と雲形・霞形・洲浜形・片流様・干潟様・松皮様などの意匠についての子細があげられている。発掘調査で明らかにした島跡をただちに比定することはむずかしいが、鳥羽離宮北殿跡で調査した島跡1は、『作庭記』言うところの「山嶋」に東殿は「杜嶋」にあてはまらないであろうか。

5、遣水について 平安京内では、堀河院跡・左京四条三坊九町跡・同じく六条三坊十町跡などで調査している。その他、鳥羽離宮跡・栢杜遺跡・大覚寺においても検出している。

意匠や規模は異なるが、遣水の遺構はそれぞれ変化に富んでいる。堀河院跡や栢杜遺跡では、流れの要所に景石を配置しているが、明瞭な玉石敷きなどは一切見られなかった。また栢杜遺跡では、遣水の途中に先述した島や低い滝が設られている。一方、左京四条三坊九町跡や鳥羽離宮

南殿跡・金剛心院跡などでは、流れ内を玉石敷きとし要所には景石を据え付けている。左京四条三坊九町跡では島が、金剛心院では、水分け石なども認められた。これと対比的なのは、左京六条三坊十町跡や鳥羽離宮東殿跡の遺構では、玉石敷きや景石・島などは見られない。

〈設けられた位置〉 堀河院跡では三条二坊九町の東三行、北四・五門で検出した。ここは、南北二町を占める堀河院の北側の町に位置し、九町の中では東側にあたる。左京四条三坊九町跡では、九町の東3・4行の北2門で発見している。この場所は九町の北東にあたり北側には三条大路が通っている。遣水跡と三条大路南側築地心からの距離は約18mたらずと非常に狭くなっている。しかしながら、三条大路をまたぐ様な邸宅跡は考えられず、今後の課題である。

左京六条三坊十町跡では、十町の東三・四行の北六門において確認している。この遣水跡は、最も広いところでは7m、狭いところでも3mを測る大規模なもので、さらに西側へと延びていくものと思われる。

鳥羽離宮南殿跡では、証金剛院と推定している建物の北側から東、そして南へと曲がりくねりながら流している。特に建物南東隅では、縁の下へと通している。金剛心院跡では、滝跡と池跡との間で検出した。この遣水跡は、滝から流れ落ちた水を池へと流すために設けられた。東殿では、池の南側に設けられている。この遣水は池の西側から見ることを意識しているため、東側からはほとんど見るができない。

栢杜遺跡では八角円堂の西側に接して設けられ、堂と一体化して作られた極めて希な調査例である。

※『作庭記』には遣水に関する記事が多くみられる。流す方向については「東より西へ流す常事也又東方よりいたして舎屋のすたをとおして未申方へ出す最吉也」あるいは「遣水をも殿舎もしは寝殿の東より出て南へむかへて西へなかつへき也北より出て東へまわして南西へなかつへき也」とある。また、「南庭へ出すやり水おほくは透渡殿のしたより出て西へむかへてなかつ常事也又北対よりいれて二棟の屋のしをへて透渡殿のしたより出す水中門のまへより池へいる、常事也」ともある。いずれにしても、東から南へそして西南へ出すべきであるとしている。堀河院・鳥羽南殿跡・平安京左京六条三坊十町の例はこれに符合する。遣水の幅については、「遣水のひろさは地形の寛狭により水の多少によるへし二尺三尺四尺五尺これみなもいゑるところ也家も広大に水も巨大ならば六七尺にもなかつへし」とある。先にもあげた左京六条三坊十町は「家も広大で、水も多ければ六、七尺にもながしてよい」の好例であろう。遣水に関わる景石については、「ひたおもてにしけくたてくたす事あるへからす…或は池へいる、所或水のおれかへる所也この所々に石をひとつたて、」また「底石水切の石つめ石横石水こしの石あるへし」と記されている。前者は堀河院跡や鳥羽南殿跡に後者は鳥羽金剛心院跡にそれを認めることができる。

6、滝石組について 発掘調査によって新に発見された滝石組の遺構としては、鳥羽離宮跡や栢杜遺跡などがあげられる。完全に埋没せずに、その遺構を伝えている例として法金剛院の「青女の滝」や大覚寺「名古屋の滝」などがある。また、その遺構を直接検出していないが、周辺部の遺構の状況から滝と考えているものが堀河院の池跡北東角で検出している。

鳥羽離宮金剛心院釈迦堂跡の東方で検出した滝石組は、後世に抜き取られてしまっていたが、それでも一番奥まった部分（鏡石）に据え付けられた石が一部残っていた。また、その手前にも旧状を復原できる石が残されていた。残っていた2個の石と導水溝の高さなどから、この滝の石組は、上下2段に組上げられていたことが明らかになった。滝の高低差は、1m前後に復原できた。ところで、残されていた石の重量は2tを測った。2個の石は、長軸を立て中軸を水平方向に用いていた。ここで、ほぼ同時代に作られた法金剛院の滝石組を見てみよう。この滝石組は、年代・作庭者それに旧状を良く伝えた貴重な遺構である。滝の石組は、計6個の石を上下2段に積み上げている。石の用い方については、下段の4個はいずれも長軸を縦方向に立て、中軸は水平方向に向いている。上段の2個の内向かつて左側の脇石は、下段と同様であるが、水を落とす石は長軸を水平方向に、中軸を縦方向に立てている。これは、この石の持っている形態（水が落ちる部分）をうまく用いて、水が綺麗に落ちるようにしている。水の落ちる部分は、正確に水平方向に据えられていることから明らかである。さらにこの石は、上端部の水平面を前方に少し倒して、幅広く落ちた水が下段の石に当たって飛び散らないように据え付けている。

栢杜遺跡の滝石組は、いま述べた2箇所とは異なり設けられた場所や落差などは違っている。すなわち、この滝は、遣水内に造られた幅約1m前後、高低さ10cmの小規模なもので、横方向に2箇所並んで造られていた。小規模ながら、水を落とす石は水平に据え付けられ、その左右には脇石なども認められた。

ところで、鳥羽離宮跡や法金剛院などの滝の水は、直接池へ落ちるのではなく遣水を流れた後に池へ注ぎ込むように設けられている。堀河院の場合もこれと同様な例であると考えている。すなわち、岩手県平泉観自在王院に見られる滝のように水は直接池へ落ちないのである。

7、舟着場 池に浮かべた舟を利用するには、舟を繋ぎ止める施設が必要である。史料には、池に面して建てられた釣殿が使用されたとが記されている。しかしながら鳥羽離宮金剛心院跡では、舟への乗り降りをも目的とした実用的な施設と考えられる石組を検出した。この石組は、長さ約150cm前後の細長く角張った2個の石を「く」字状に据えその両端には景石を据え付けたものである。一見すると橋台石と橋挟石の様にも見られる意匠をしている。この石組から西側の正面には舟から下りた人の動きを遮るような景石が据えられている。

鳥羽離宮の例は平安時代後期（12世紀中頃）であるが、これよりさらに古い例として神泉苑で明らかにした池北岸の遺構がある。この施設は、板材を池の汀に置いた簡単なものである。制約された調査区のため詳細は明らかでない。

浄瑠璃寺の池にも、石で構築された舟着場が残されているが、室町時代の遺構であると言われている。

8、釣殿 釣殿跡の発掘調査は極めて少ないため鳥羽離宮で明らかにした遺構は極めて重要である。釣殿遺構は金剛心院釈迦堂跡の東側で発見した。釣殿および廊は、釈迦堂東面に翼廊状に取り付いており、釣殿廊の柱は釈迦堂南庇の柱筋に揃えている。この廊は西妻から東へ6間で南へ折れ曲がり、釣殿となる。廊と釣殿の柱間寸法は同一で、梁間3.6m、桁行寸法は2.5mである。

廊の西妻側から東へ5間目は3.6mと幅広に作られており、この部分を馬道と考えている。釣殿の東側では釣殿の縁東の礎石と雨落ち溝とが、同一線上に並んだ状態で一部残っていた。これと同様な遺構は、九躰阿弥陀堂跡で検出している。それは縁であり、釣鐘の場合も1.2mほどの縁がつけられた。

釣殿には3個の礎石が残存していたが、釣殿南端部の2個は大振りの砂岩を使っていた。縁東礎の礎石は景石と同質であり、据付の姿や景石風に仕上げられていた。釣殿部分の礎石に比べて釈迦堂や九躰阿弥陀堂などの礎石はいずれも花崗岩で柱座を造り出していたのとは対象的である。

※『作庭記』に記されている釣殿についてみてみよう。釣殿に関わる部分は3箇所のみられる。すなわち、「釣殿の柱におほきなる石をすゑしむへし」と「つり殿のすのこのしたけたと水のおもとのあひた四五寸あらむほとをはからひて」と「つり殿のしたけたの下はより水のおもにいたるまで四寸五寸をつねにあらしめて」とである。

その内容は、釣殿に用いる礎石は大振りの石を用いること、釣殿簀子縁の下桁と池の水面とは常に、12cmから15cmほどは離すようにと記している。いずれも実用的な内容であり、釣殿に対する配慮を知ることができる。なお、簀子縁の下桁と池の水面との間を0.12mから0.15mにせよとあるが、この数値は釣殿と船縁との関係を重要視したものであり、水の調整がしやすい平安京内でのことであろう。特に鳥羽殿や法住寺殿などのように大規模で、自然の影響を直接受けやすい所ではその環境に適した工夫がなされていたはずである。

9、橋 平安京およびその周辺部において、平安時代の、橋跡を調査した例は極めて少なく、まして庭園内の橋遺構は鳥羽離宮跡および左京六条三坊十町跡だけである。鳥羽離宮跡では、金剛心院九躰阿弥陀堂跡の東面に作られた池で検出している。この橋は東西方向に架けられ、橋の中軸線と九躰阿弥陀堂の建物中軸線とは同一線上に揃えられている。橋の東端は調査区外にあたるため全長は明らかでないが、幅は150cm、橋脚の東西寸法は180cmを測った。橋脚は、丸柱と四角に面取りしたものが混在していた。いずれの橋脚も先端を杭状に尖らせ、地中へ約80cmほど打ち込んでいる。橋の左右には、橋挟み石や台石などは一切見られなかった。

左京六条三坊十町跡の例は、遣水に架けられた南北方向の橋である。橋は直線的でなく中央部で「く」字状に折れ曲がっている。幅は約1.8m、全長約7.8mを測る。橋脚は先の鳥羽離宮跡の例とは異なり、杭状を呈さない。設けられていたのは一町の東西中軸線より東10mほどの所である。

10、井戸 庭園内に造られた井戸跡は、金剛心院釈迦堂跡東方の洲浜上と九躰阿弥陀堂跡で発見している。この他に、東殿跡でも苑池の洲浜上で検出している。これらの井戸はいずれも、層位関係や遺構の前後関係などから苑池と同時代に機能していたことは明らかである。井戸の構造はそれぞれに異なっているが、特別な構造は見られず当時の一般的な井戸となら変わりのないものである。

4. 結 び

平安京およびその周辺部で行った発掘調査で検出した平安時代の庭園遺構の実態を概観した。

また、一部ではあるが検出遺構と『作庭記』に記されている記事とを比較してみた。以下、今回述べた内容を要約して結びとしたい。

1、石の据え付け工法は、礎石と全く同様な方法を用いている。そうした現象は、大規模な礎石建物の造営に関係していた石工などの人々によってなされたことを物語ると考える。

2、自然の池を利用した園池や堤を築いて設けた以外は、基本的に浅く仕上げられている。調査で発見した平安京内の池は、そのことを良く示している。

3、洲浜は平安時代前期には京内の邸宅に見受けられるが、使用されている石は拳大の玉石が一般的であった。割石を用いた例は極めて希である。玉石は、粘土などを用いて固定する場合も見受けられるが、多くは玉石を上から軽く押さえる程度での固定であった。

4、島の構築は、構築場所の環境条件にあった様々な工法が採用されており、『作庭記』の記述以外の方法がとられている。『作庭記』のそれは、平安京内の池を設ける際でのことと思われる。ところで、栢杜遺跡に見られた島は、室町時代以降の庭園によく見られるような島の周囲に石を並べる工法や意匠の初現として注目される。

5、『作庭記』にある釣殿の簀子縁下桁と池との寸法は、自然条件の影響をあまり受けず比較的水量調整のしやすい平安京でのことであろう。鳥羽離宮跡や神泉苑などのような広大で、かつ自然環境に影響されやすい場所では実用的な舟着場が作られた。

6、遣水については、位置・流れの方向・規模・意匠など地形や立地条件などにより様々であった。「作庭記」にある遣水に関する記述内容は平安京内でのことである。

7、井戸については、庭園内のしかも園池近くに設けられたものの調査例はほとんど聞かないが、宇治の平等院鳳凰堂の南側にある阿弥陀水がこれに近いものであると考えられる。使用目的については、設けられている場所が庭園内の洲浜上であり、しかも日常的な空間でなく仏教色の強い場所であるため、仏事に使用する水を汲み取る目的だけに造ったものであろう。

ところで、平安京跡では右京・左京で発掘調査を実施しているが、貴族・庶民を問わず当時の住宅事情はまだ明らかでない。その中で、右京六条一坊五町では平安時代前期に比定されるほぼ一町四方の邸宅跡を調査した。しかしながら、池や遣水などの庭園遺構は残念ながら一切見られなかった。この邸宅の主がどのような人物であったかを特定することはできないが、当時邸宅内に庭園を構えることは極めて希なことであったことを物語っているように思われる。今後とも、平安時代の貴族住宅の解明を含めて平安時代庭園の技術を明らかにしていきたい。

註

(1) 辻 純一、平尾政幸「左京二条二坊(2)高陽院跡2」『平安京跡発掘調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局文化財保護課・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。

(2) 網 伸也、内田好明、高 正 龍「平安京左京二条二坊・高陽院跡1」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和63年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年。

(3) 網 伸也「平安京左京五条二坊」『平安京跡発掘調査概報』平成元年 京都市文化観光局 1990年。

- (4) 内田好明「平安京左京二条二坊」『平安京発掘調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年。
- (5) 菅田 薫、本弥八郎、吉川義彦「左京三条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年。
- (6) 尼崎博正『古庭園の材料と施工技術に関する研究』 1985年。
- (7) 上村憲章、小森俊寛、長戸満男、原山充志「平安京左京三条一～四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成2年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
上村憲章、小森俊寛「平安京左京三条一・二坊・神泉苑・史跡旧二条離宮」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成3年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (8) 南 孝雄、清藤玲子「平安京四条一坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成4年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- (9) 小森俊寛、上村憲章「平安京左京四条三坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和62年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年。
- (10) 内田好昭、丸川義広「平安京左京六条三坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成2年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (11) 現地説明会資料。
- (12) 堀内明博、木下保明「平安京右京三条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和61年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年。
辻 裕司「平安京右京三条一坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成元年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (13) 木下保明「史跡嵐山」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和63年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年。
- (14) 『史跡大覚寺御所跡発掘調査概報』 大覚寺 1986年。
- (15) 鳥羽離宮跡の発掘調査は、1960年以降京都府、京都市、鳥羽離宮跡調査研究所、京都市埋蔵文化財研究所によって継続的に実施されている。
鳥羽離宮跡発掘調査概要一覧
 - a 杉山信三「鳥羽離宮跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1964年。
 - b 杉山信三「鳥羽離宮跡昭和39年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1965年
 - c 「鳥羽離宮跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1972年度 京都市文化観光局文化財保護課 1974年。
 - d 「鳥羽離宮跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1973-II 京都市文化観光局文化財保護課 1975年。
 - e 「第41-42次調査」『鳥羽離宮跡』昭和53年度 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1979年。
 - f 「第44次調査」『鳥羽離宮跡』昭和53年度 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1979年。
 - g 「第58次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市

平安時代庭園の施工技術

埋蔵文化財研究所 1981年。

h 「第86次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要』昭和58年度 京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年。

i 鳥羽離宮跡「第95次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度 （財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年。

j 鳥羽離宮跡「第97次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度 （財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年。

k 「鳥羽離宮跡第102次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度 （財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年。

l 「鳥羽離宮跡第109次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度 （財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年。

m 「第112次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和60年度 京都市文化観光局・（財）京都埋蔵文化財研究所 1986年。

n 「第115次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要』昭和60年度 京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所 1986年。

o 「第117次調査」昭和61年度 京都市文化観光局・（財）京都埋蔵文化財研究所 1987年。

p 「第128次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年。

q 「Ⅱ 第129次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』昭和63年度 京都市文化観光局・（財）京都埋蔵文化財研究所 1989年。

r 「第131次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年。

s 「第134次調査」『鳥羽離宮跡調査概要』平成元年度 京都市文化観光局・（財）京都埋蔵文化財研究所 1991年。

(16) 杉山新三『栢杜遺跡調査概要』鳥羽離宮跡調査研究所 1975年。

(17) 1994年度調査（未報告）。

(18) 田村 剛 『作庭記』相模書房 1963年。

森 蘊 『作庭記』の世界 日本放送出版協会 1986年。

(19) 「第74次Ⅱ・75次・76次・79次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要』昭和57年度 京都市文化観光局、（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年。

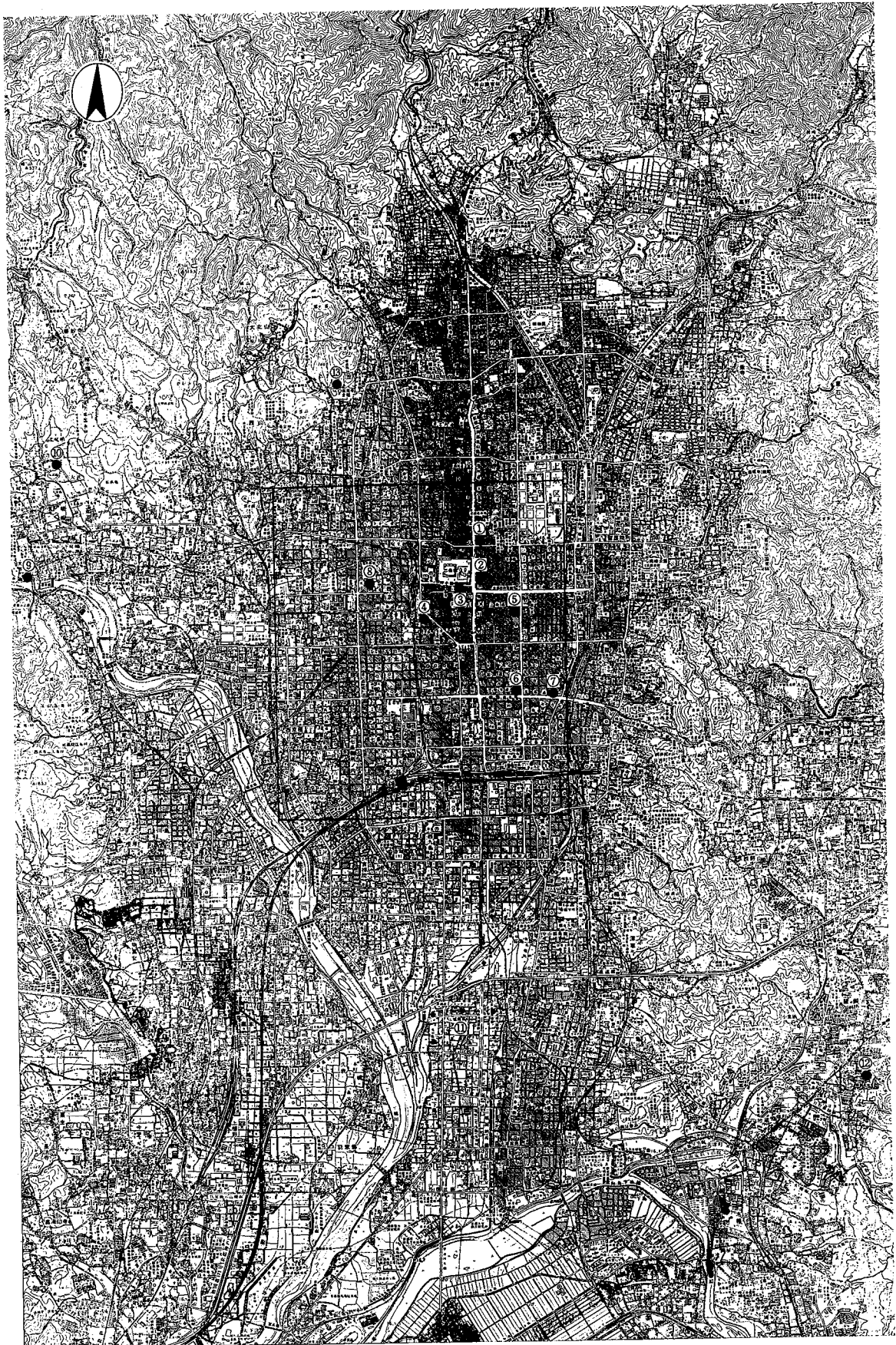
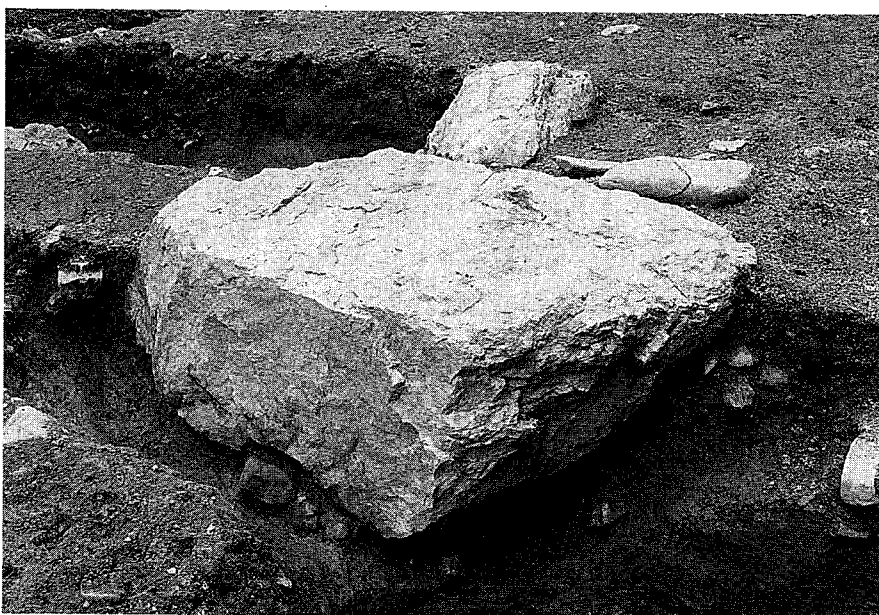


图5 遺跡位置图 (1/90,000)



高陽院跡（十六町）池東岸の景石



* 3例とも石の天場は、きちりと水平にしている。

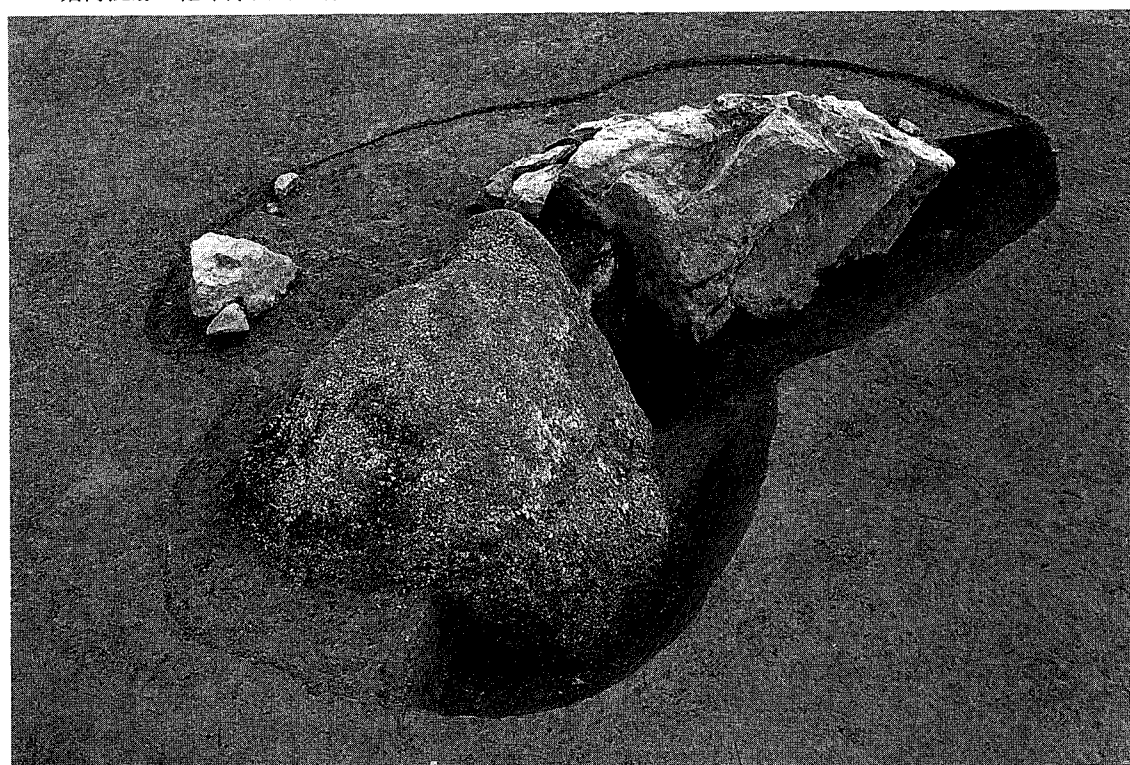
高陽院跡（十六町）池東岸の景石



高陽院跡（十六町）池東岸の景石



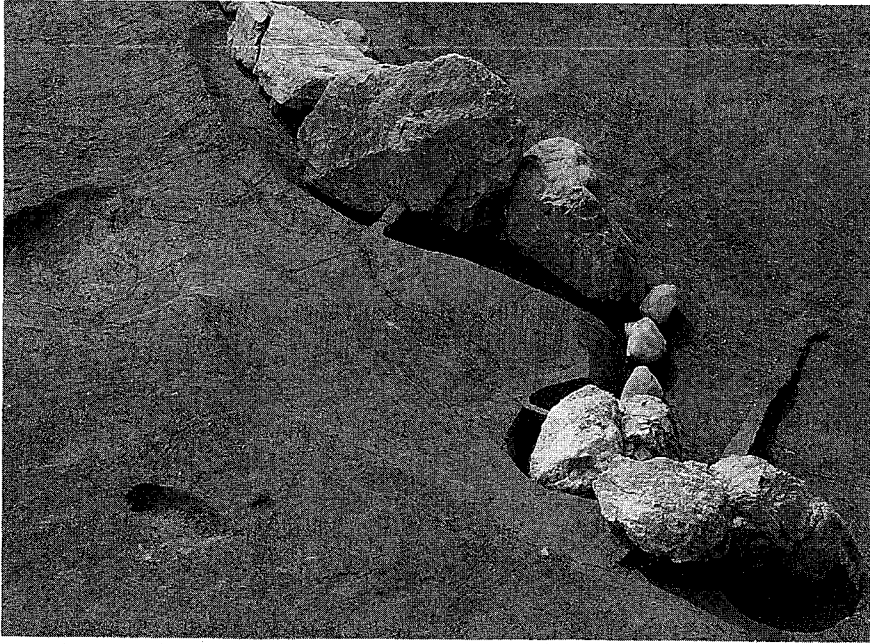
堀河院跡 池東岸近くの景石



鳥羽離宮金剛心院跡（釈迦堂東方）一つの掘形内の景石



鳥羽離宮金剛心院跡（九林阿弥陀堂前池）一つの掘形内の景石

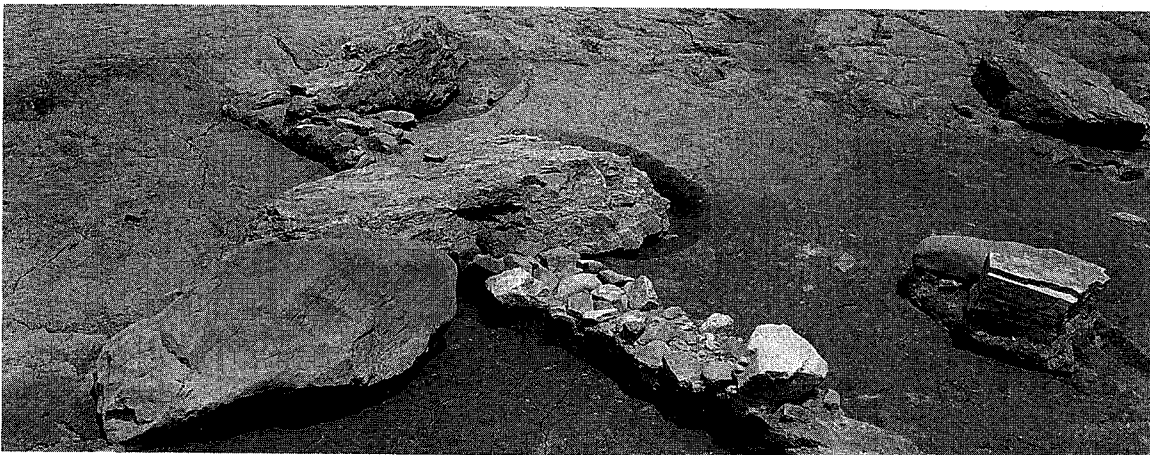


*池汀や洲浜上に据え付けられた景石

鳥羽離宮金剛心院跡（釈迦堂東方）汀での状況



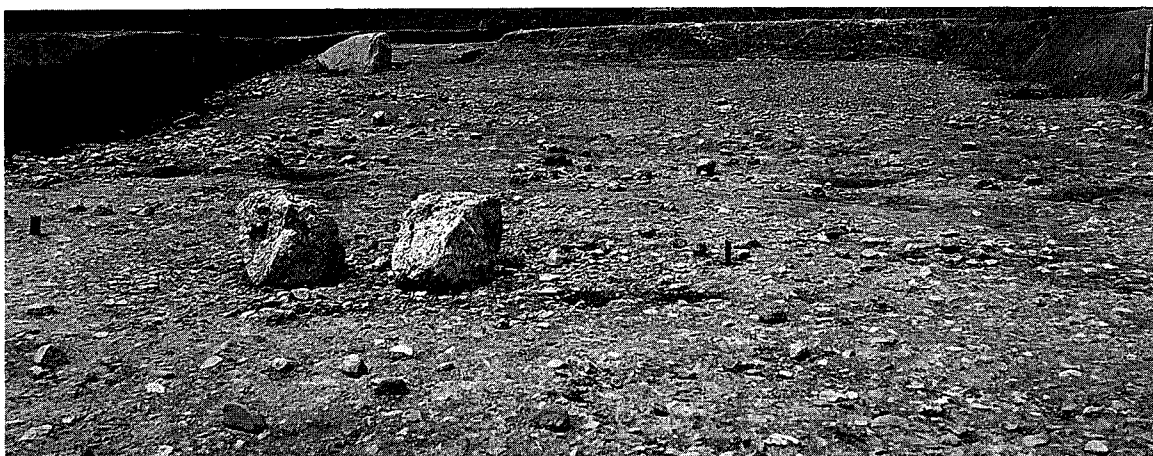
鳥羽離宮勝光明院跡池西岸での状況



鳥羽離宮金剛心院跡（九輪阿弥陀堂前池）洲浜上での状況



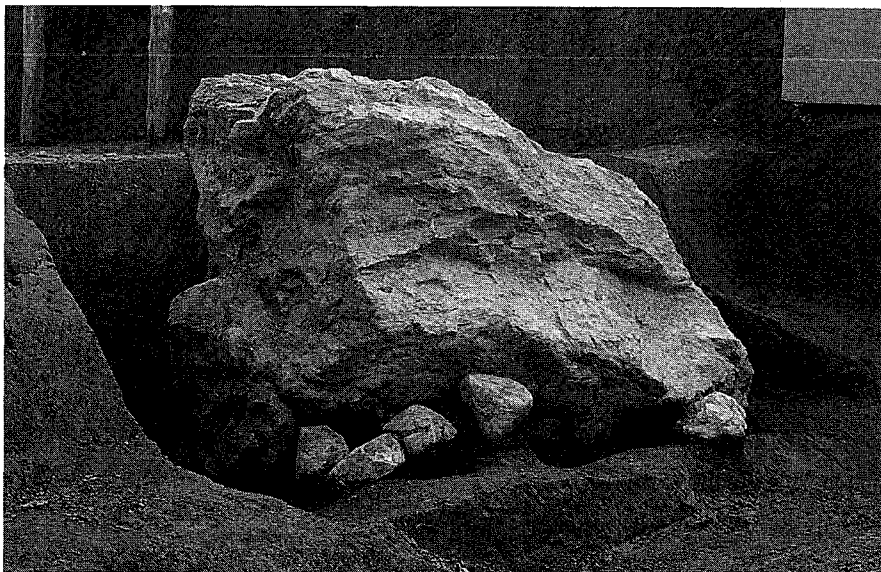
堀河院跡 滝から流れ出た水が池へ注ぐ所に据え付けられた景石の状況



鳥羽離宮跡 鳥羽離宮北殿の一角に造営された勝光明院の庭園で、浅い池内に据えられた景石の一つである。



鳥羽離宮跡 東殿に設けられた苑池の中央部には出島が造られたが、この景石は出島の北半の洲浜の汀に据えられた景石の調査状況である。



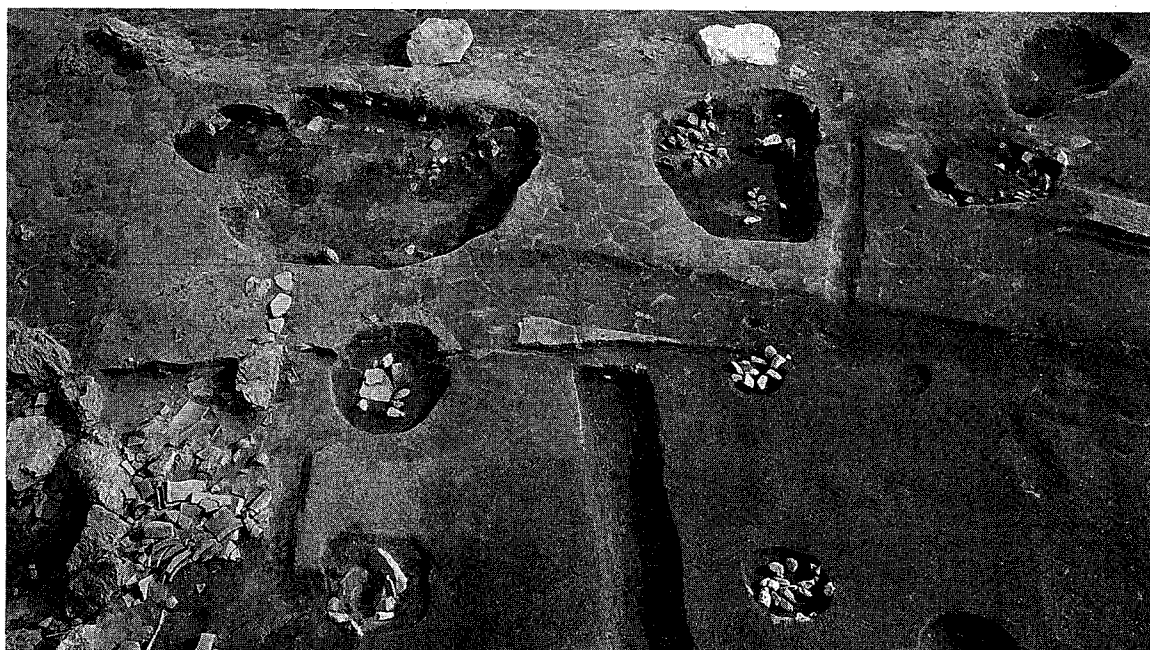
鳥羽離宮跡 金剛心院の釣殿対岸で発見した景石である。この石の3分の2までが地中に埋められているにもかかわらず、その石の根元には根固め石が丁寧に詰められている。



高陽院跡（十六町）
石の根元（底部）には、拳大の礫が全面に詰め込まれていた。



景石除去後の根固め石



鳥羽離宮跡 金剛心院釈迦堂跡の東側で検出した釣殿跡の根固め石の状況である。



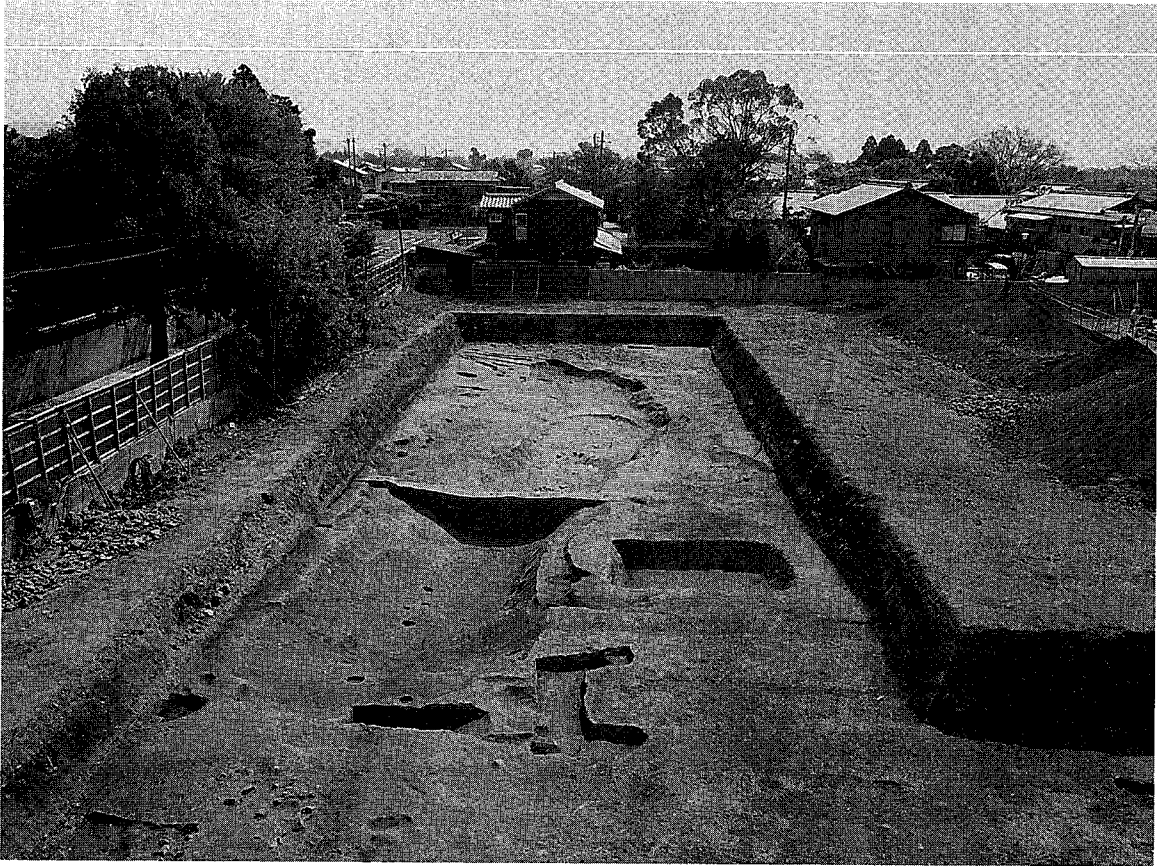
三条棧敷殿跡 遣水内に作られた島上に置かれた景石であるが、その姿は方向によっては亀の甲にもみえる。水辺の小動物の姿に似た石をこのように用いた例はさきわめて稀である。



鳥羽離宮跡



鳥羽離宮跡 複数の石を組み合わせて、池の汀に据え付けられた景石である。ここに見られる石組みは『作庭記』にある「三尊仏の立て石」とはこのような姿のことであろう。



史跡嵐山 池の水の確保には、その地に適した様々な方法が採用されていることはよく知られている。平安時代の池は概ね浅く掘られているが、その中であってこの池は例外的な存在である。



鳥羽離宮跡 東殿を除き自然の池の汀を人工的に掘り窪めて苑池としている。



賀陽院跡（九町） 洲浜は、平安時代前期の園池からよく見受けられる。用いられている石は、ほとんどが粒の揃った拳大の川原石である。



史跡嵐山 洲浜に用いられている石は、角張った石を多用している。この例はきわめて稀である。こうした現象は石の採取場所の違いから発生したものではないと考えている。



平安京左京四条一坊一町跡



平安京右京六条二坊八町跡 洲浜の石は、大小様々あり粒を揃えようとする意志はみられない。



高陽院跡（十六町） 藤原頼通は、こうした意匠の洲浜が好みであったのであろうか。



高陽院跡（九町）池北岸第Ⅱ期の洲浜 粒を徐々に変化させているのは、今のところこの一例だけである。12世紀中頃の高陽院で作られたものである。



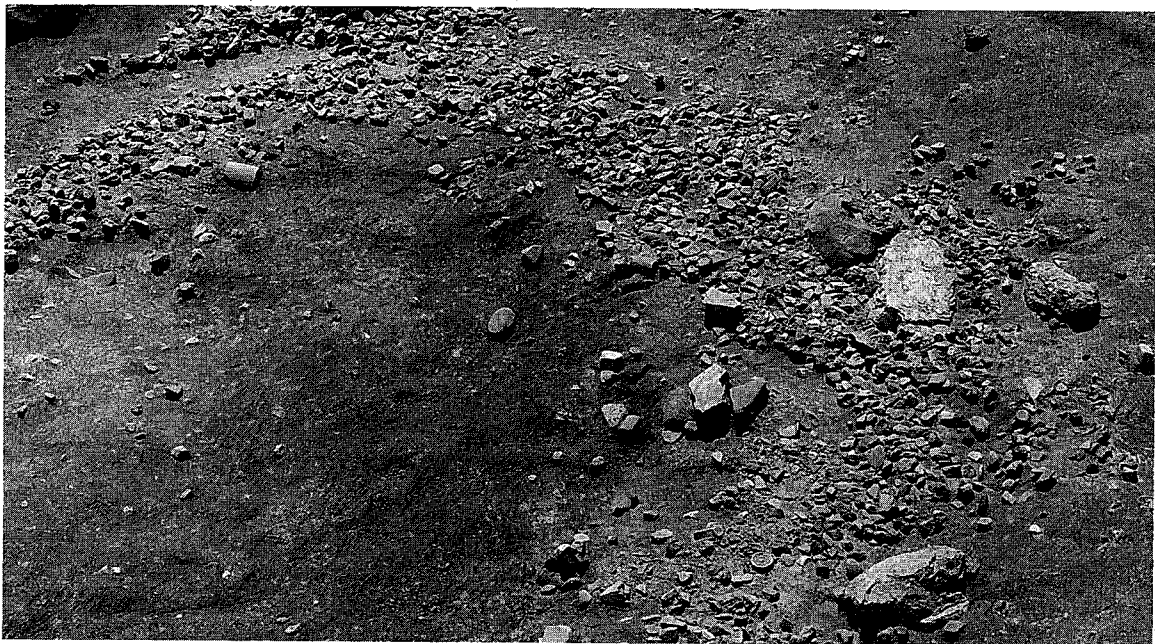
高陽院跡（九町） 第Ⅱ期の池上面で発見した洲浜であるが、その様子は全く異なっている。



鳥羽離宮跡 あまり人為的な意匠ではなく自然な感じに仕上げている。



鳥羽離宮跡 池の規模・場所・時代・作庭者の違いによって様々に変化している。



鳥羽離宮跡（九輪阿弥陀堂池前）



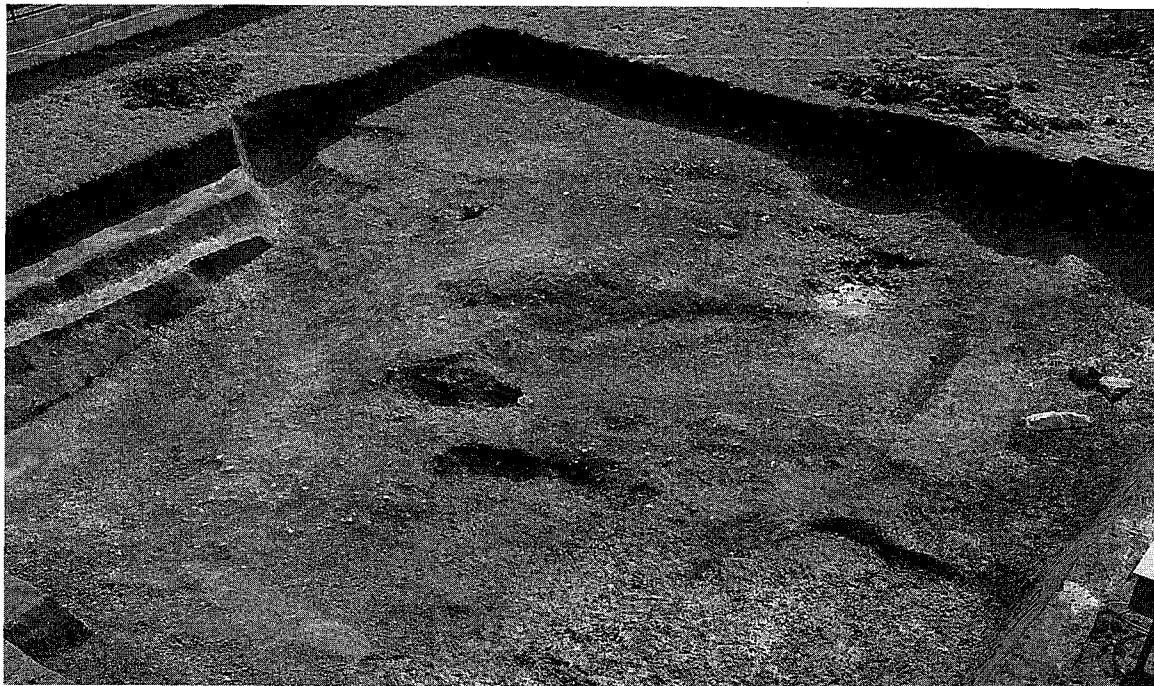
鳥羽離宮跡（出島西面）



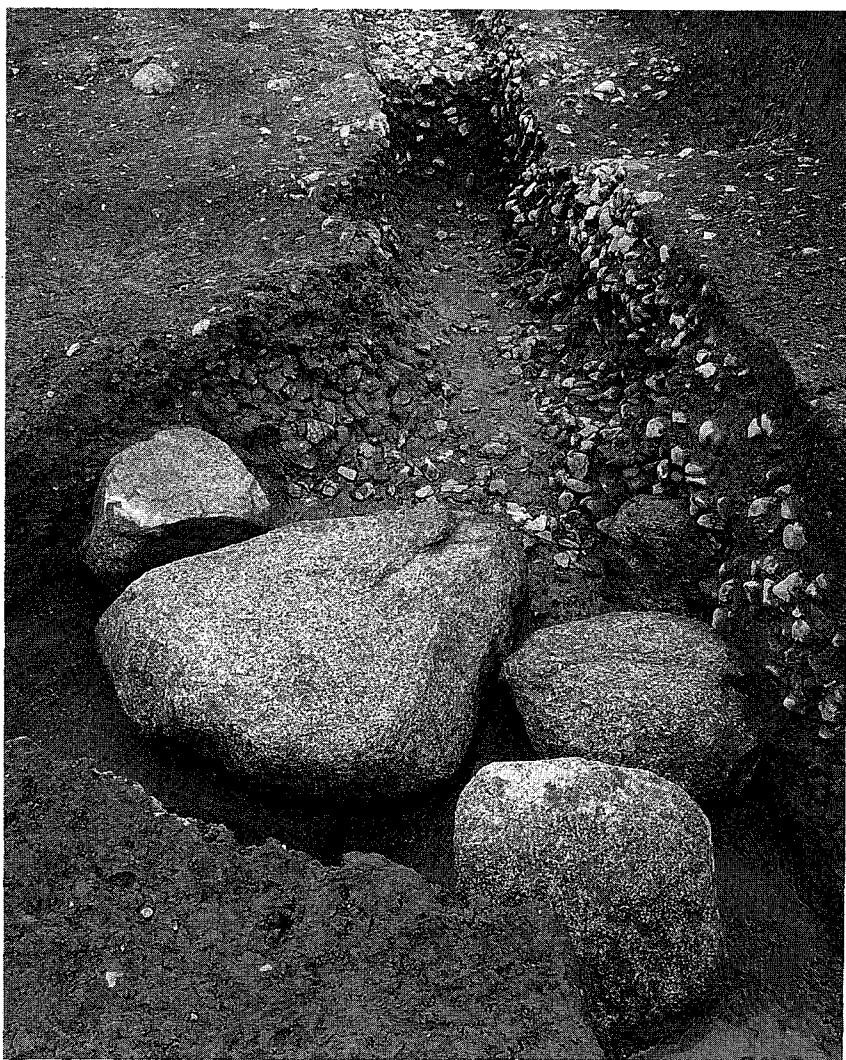
鳥羽離宮跡 島 I



鳥羽離宮跡島 I 布掘り状の地業 この島は池を掘り窪める際に布掘りをおこない、その後、版築によって構築している。



鳥羽離宮跡 鳥Ⅱ



鳥羽離宮跡鳥Ⅱ埋め立ての地業（石列と玉石） 埋め立てに際しては拳大の玉石を多量に用いている。



三条棧敷殿跡遺水内の島 遺水内に作られた小さな島であるが、溝を完掘した後にベースの土を用い版築して作っている。



三条棧敷殿跡遺水内の島 玉石を取り除いた状態



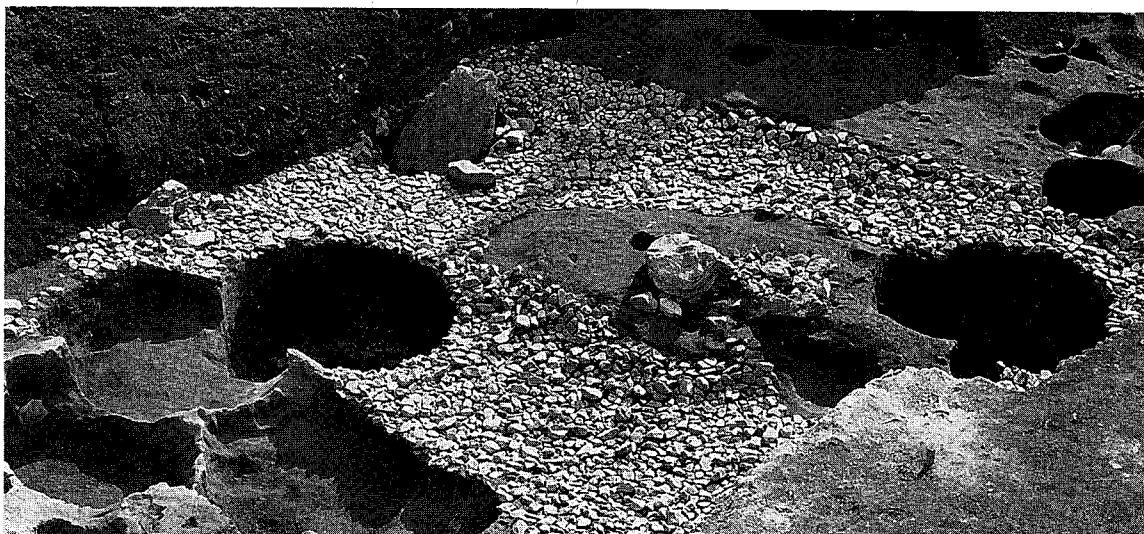
鳥羽離宮跡出島西半部の状況 池を掘り窪める際に、島部分を掘り残して形作った島である。



栢杜遺跡 中世の島と全く同様であり、新しい意匠の島がこの頃に誕生したことを物語る貴重な資料である。



平安京左京六条三坊九町跡 粒を揃えた川原石によって、遣水の両肩を敷き詰めている。



三条棧敷殿跡 遣水全体を玉石敷きによって仕上げている。敷地の北端に作られながら、このような手のこんだ遣水は、極めて稀であり、この遺構が重要な役割を果たしていたことは間違いない。



堀河院跡の遣水 池の北側に設けられた遣水で、流れの要所要所に景石を配した意匠である。玉石敷きなどは一切みられない。



鳥羽離宮跡遣水 池への注ぎ口付近になると、洲浜の玉石がその両肩まで敷き詰められている。



鳥羽離宮跡 金剛心院内で発見した滝組で、落差1mを測る。平安時代の滝の水は直接池に落ちることなく、一端は遣水を流れた後に池に注ぎ込んでいる。



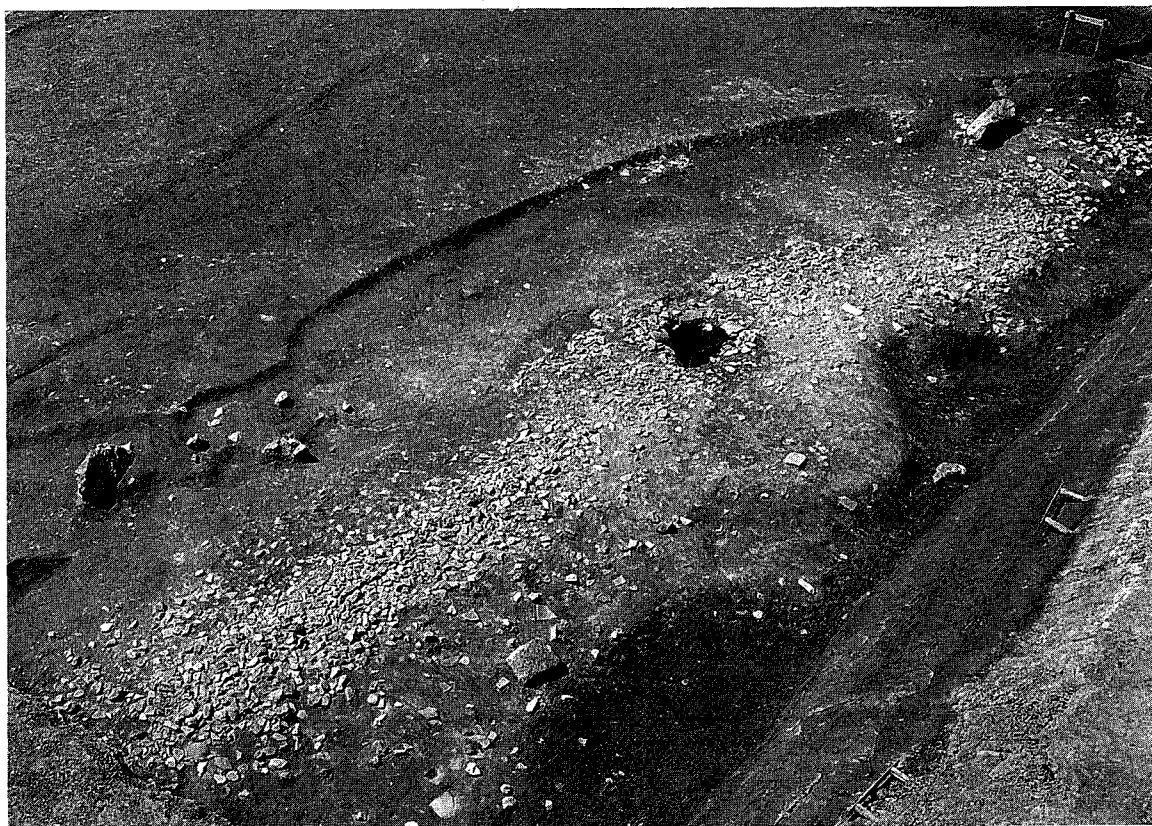
堀河院跡滝石組の一部と遣水 平安京内で発見した初めての滝石組と遣水状遺構である。玉石が敷かれているところが、遣水の注ぎ口である。残されていた石組から、この滝の落差は1m以下であったと考えている。



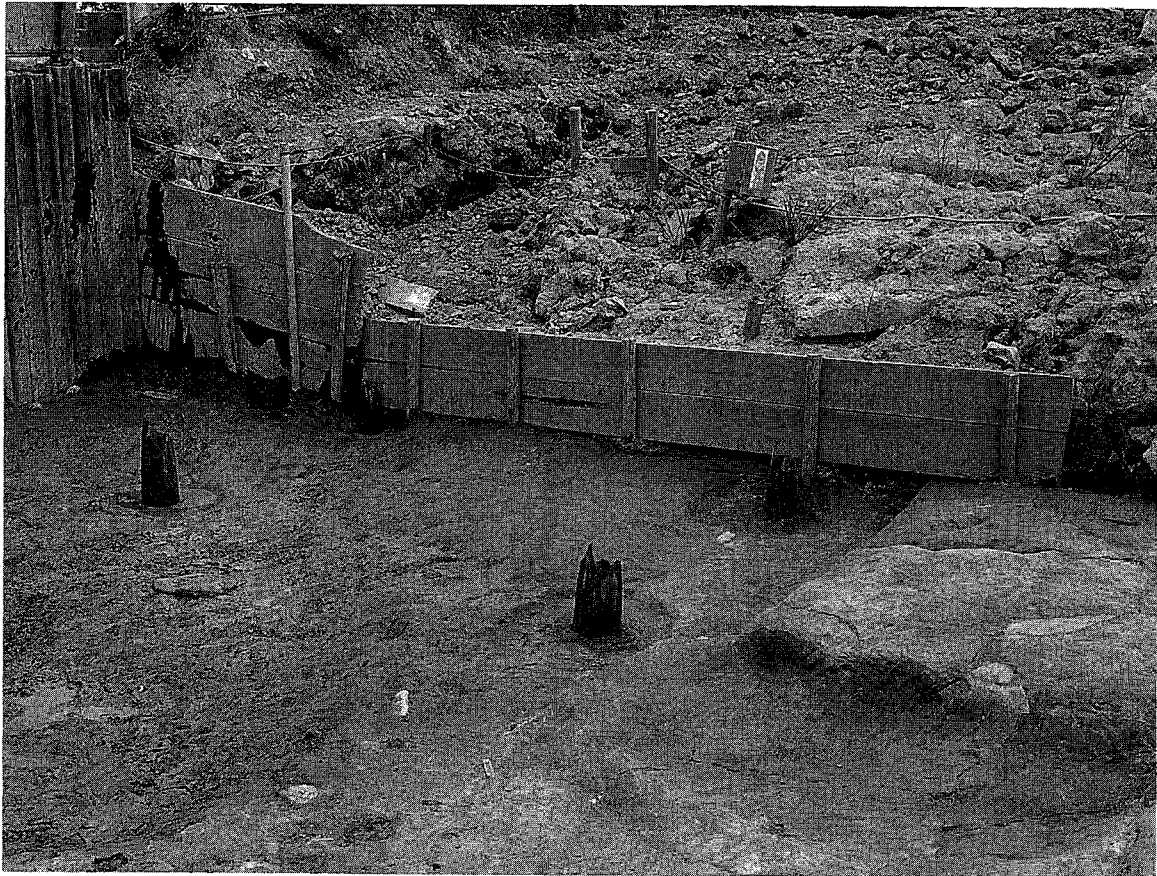
鳥羽離宮跡（釈迦堂東側）舟着場 釣殿のすぐ東側に設けられた舟着場と考えられる石組で、一見すると橋台石や橋挟み石のようにみえる。



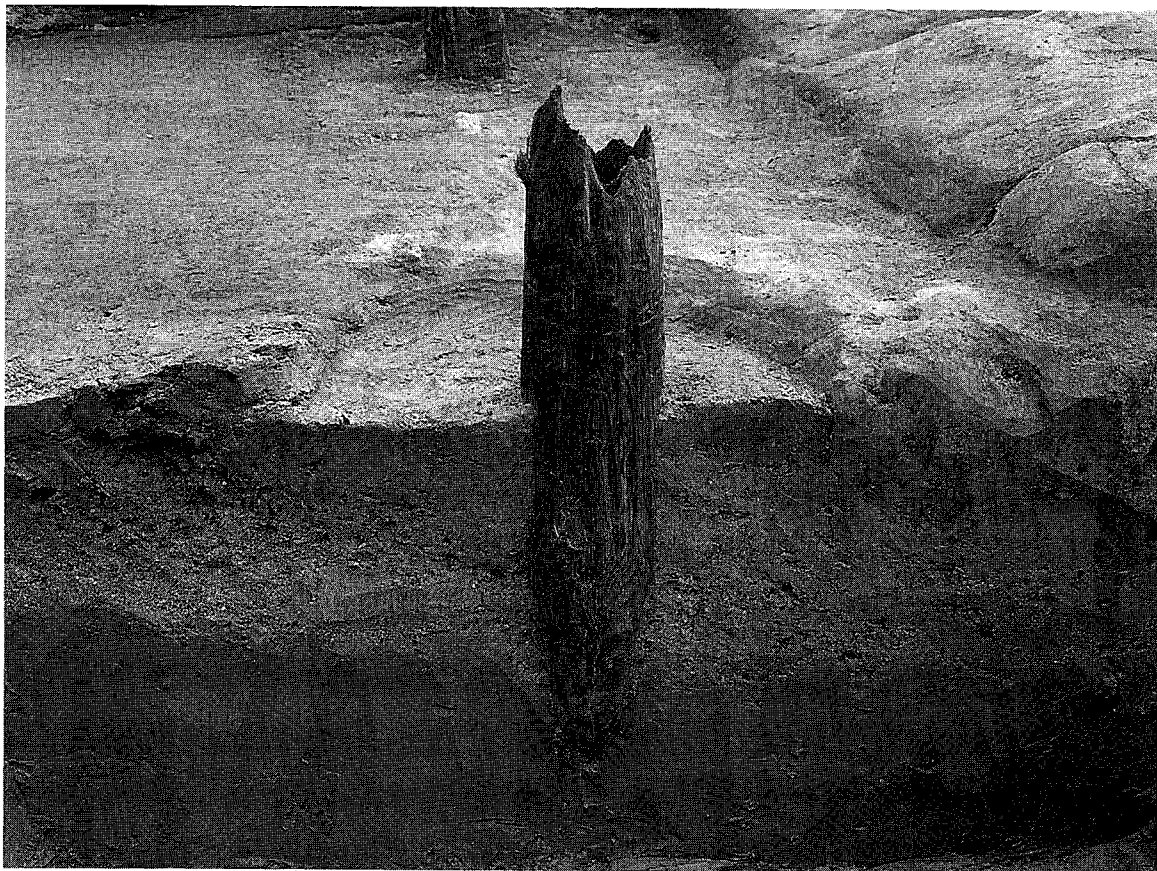
鳥羽離宮跡（釈迦堂東側）釣殿 釣殿の南半部で、南端は池の汀に礎石を据え付けている。この部分の礎石は砂岩であるが、他の礎石は花崗岩であり規模も小振りである。石材の使い分けがなされた。



鳥羽離宮跡（九躰阿弥陀堂前池）洲浜と井戸 洲浜上に設けられた井戸である。構造は一般的なものである。



鳥羽離宮跡（九躰阿弥陀堂前池） 橋の東西には橋台石や橋挟み石などは設けられていない。



鳥羽離宮跡（九躰阿弥陀堂前池） 橋脚の細部 橋脚は打ち込んでいる。